

節目を飾った二つの“千葉国体”



ゆめ半島千葉国体で、ベンチから試合を見守る小原さん(右端)

小原 満里子さん(千葉市)

栃木県出身。日本体育大学ソフトボール部時代に、長崎国体優勝、全日本チーム主将として大学世界選手権出場。現在、成田国際高校教諭、千葉県ソフトボール協会常務理事。三味線や民謡が趣味で、高齢者施設への慰問演奏活動を十年以上続けている



「教育者たる者、何でもできて当たり前」という信念の下、三味線の師範に始まり、茶道、華道、料理、社交ダンス、エアロビクスなど数々の指導者資格を持つ。「何でも楽しくやる」がモットーの、まさに「スーパースター」先生だ。

昨秋の、ゆめ半島千葉国体。監督として、成年女子ソフトボールの千葉県チームを指揮した。
初戦の熊本県戦は、最終回に巡ってきたサヨナラのチャンス逃し延長戦へ。無死二塁から互いに攻撃し合うタイブレーカーで惜しくも敗れ、「チャンスに、あと一本が出ませんでした」と悔しがる。

プレーヤーとしての国体出場経験も豊富だ。38年前の教員1年目のときには、若潮国体に出場。学生時代の活躍を買われ、県内の実業団チームに助っ人として引き抜かれたのだ。平日はソフトボール部の顧問として学校で子どもたちを指導し、土日はプレーヤーとして実業団チームのグラウンドで汗を流した。

「結果は3位でした。大会前は仕事と



若潮国体でホームインする小原さん

競技を両立しなければなりませんでしたが、学生時代に厳しい練習を乗り越えてきましたので、まったく苦になりませんでしたね」

平成12年には、ソフトボール指導者としての力量を買われ、男子硬式野球部の監督に。十年以上、夏の大会で初戦敗退だったチームを立て直し、就任3年目には、女性監督として県内初となる夏の県大会1勝を成し遂げた。

「ソフトボールの練習法や戦術を取り入れたのがよかったんでしょう。3年間指導してきた教え子たちだったので喜びもひとしおでした」

この3月には定年だ。『千葉国体』で始まった教員人生は、偶然にも『千葉国体』の年に閉じようとしている。

「初戦の熊本県戦は、ちょうど60回目の誕生日だったんですよ。勝利していれば最高だったんですが、まだ人生は終わじゃない」と神様が課題を与えてくださったんでしょう」と、笑顔を見せた。

編集後記

「千葉がひったくり全国一」というニュースをご記憶でしょうか。防犯まちづくりに取り組む本市としては見過ごせない話題でしたが、仕事柄気になったのが“ひったくり”という用語。窃盗の呼び名はほかにも、万引き、すり、空き巣、置き引き等々。ひねったネーミングに加えこっそり盗むという意味から、犯罪の中でも軽く見られがちですが、呼び名はどうあれ罪は罪。結果的に被害者に傷害を負わせることすらあります。ただ、窃盗の多くはちょっと気をつければ撲滅可能とのこと。窃盗対策も“防犯のまち”には欠かせません。



成田市役所本庁舎(行政棟、議会棟、消防本部、成田消防署)はISO14001の認証登録を受けています。